

音楽の散歩道 その10の7

ベートーヴェンの「第9」200年記念 パガニーニとその関連の話

鹿児島市	粟 博志
東区・荒田支部	粟 隆志
大海クリニック・大海宮崎クリニック	大西 浩之・海江田 寛・牧野 智礼
加治木温泉病院	夏越 祥次

はじめに

絵画（美術雑誌を含む）を眺めていると、実に様々な事に気付く。



図97 作者は誰？（1844作）
画面を2分する空と大地。朝日に頭を下げ、祈る村人。右側の女性の頭部が、空の方に出ている構図に注意。女性の前方の男性は夫だろう



図98 作者は誰？（1844作）
「大気、光、色彩」のロマン派の画家、印象派の画家にも影響を与えた

さて質問であるが、図97の、この有名な絵をみて、作者と題名がお分かりだろうか？
分かった方は、かなり絵画好きと言えよう。
分からなかった方は、更に図98を見ていただきたい。2つの絵の共通点は何だろうか？

特に昔の絵画は、当時の生活習慣や、社会・自然環境などを、画家自身の目を通して現代に蘇らせてくれる、言わばタイムマシンと言えよう。

子供の頃から今日に至るまで、国内外の画家達の図鑑を見たり、画廊、展覧会、展示会あるいは美術館で、絵画や美術工芸品を鑑賞する事は、私の最大の趣味である。

先日も図鑑でピカソの絵を眺めていて、彼の絵の中に隠されている興味深い事実を発見し、6割方文章にした所で、ある事に気付き断念せざるを得なかった。

でも工夫して書きあげようと思っているし、音楽に続き絵画の事も書きたいと思う。

さて当初の質問の答えを言うと、2点の絵はイギリスを代表する画家ターナー（1775-1851）の作品である。

彼は、「大気、光、そして色彩」のロマン派の画家で、印象派の画家にも多大な影響を与えた。

重要なポイントは、彼がヨーロッパのロマン派の音楽家達と、同じ時代を共有していた事である。

2点の絵の内、前者は 1813年作の「霜の朝、テイト・ギャラリー、ロンドン」である。

一見すると、敬虔な農夫達の穏やかな朝の農村風景と見えるだろう。それは正しい。

然し、このような農村風景の絵は、実際には非常に少ないのである。多くは、山、小川、森、草原、草を食む牛や羊、朝日、夕陽などの ^は ^{のどか} 長閑な田園風景である。

この絵をよくよく見ると、朝日に手を合わせている人達の周囲の風景の中に、寒村の厳しく、ぞっとするような、ぬかるんだ道路が克明に描かれているのに、気付くはずである。

苛酷な環境下であるからこそ、朝日に頭を下げる村民の姿が崇高に感じられる。

仏のバルビゾン派の傑作、1857-59年作のミレーの「晩鐘」の40年も前の作品である（図99）。



図99 ミレーの「晩鐘」（1857-59作）
画面を2分する空と大地。夕陽に頭を下げ、祈る村人。女性の頭部は、空の画面に出ている。背景には尖塔の建物。ミレーの絵はターナーの絵の一部を切り取った構図。今まで誰も気付いた人はいない（宗博）

画面を2分する空と大地。朝日と夕陽の違いはあるが、大地より空の方が明るい。

ターナーの右端の女性を見てほしい（図97）。腰からではあるが、頭を下げて杖をついたように見える女性は、頭部だけが空の画面に飛び出し、存在感を強調している。

馬車の後方に立っている男性は夫だろう。

ミレーと左右は異なるが、遠景には尖塔のある建物。馬車の代わりに手押し車、じゃがいもしか食べられない厳しい生活。

ターナーの画面の馬車の右の男女を切り取れば、まさしく「晩鐘」である。

ミレーは後年、祖母の畑仕事で鐘の音を聴いた時の様子を思い出しながら描いたと述べているようだ（祖父の事は言及していない！）。ただ私は、ミレーが「霜の朝」を知っていたに違いないと思っている。

ミレーが、ターナーの絵によりインスピレーションを得たとしても、別に悪い事ではないが、ミレーのコメントはあやしい。

最大の関心事は、165年間、「霜の朝」と「晩鐘」の関係を論じた論文が無い事である（図97,99）。つまり誰も気付いていない。

また脇道に逸れたが、本題に戻ろう。

ターナーの「霜の朝」は、当時の英国の道路事情（悪路）を描いたものでもあるが、ヨーロッパ全体が、同様の状態であった。

図98は、1844年作の「雨、蒸気、速度ーグレート・ウェスタン鉄道、ナショナル・ギャラリー、ロンドン」である。

2枚の絵の共通点は、もうお分かりだろう。

2つの時代の交通事情を、ターナーは如実にキャンヴァス上に描き残したのである。

スコットランドのジェイムズ・ワットが、新型蒸気機関の特許を取得したのは、1769年の事である。

これにピストンの往復運動を回転運動に変換する、大発明のクランク機構が加わり、トレビシックが蒸気機関車を発明し、1825年に、英国のストックトンーダーリントン間に、世界初の鉄道が開設された。

19世紀初頭の英国の産業革命により、鉄道は「時間と空間を征服」し、国家間交流は盛んになり、市民階級が台頭してきた

のである。もちろん負の部分も多々あったが。

鉄道網は、破竹の勢いで拡がり、19世紀頃には、全ヨーロッパに張り巡らされた。

ターナーの絵は、時代の変化を見事に捉えている。

鉄道の発達の前後で、音楽家達の移動も一変した。



図100 バガニーニの特製といわれる馬車

図100は、バガニーニ所有の四輪馬車と言われるものである。

バガニーニは、少し早く生まれすぎた。

後年、病弱だった彼は、この馬車や乗合馬車による演奏旅行で、多大なる辛酸、苦汁を

味わったのである。

一方、リストの後年は、鉄道により、快適な演奏旅行を楽しんだと思われる。

リストは、遠くイスタンブールから、ウクライナのキーウまで広範な演奏旅行を行ったし、最後の15年間は、1年を3分割し、ハンガリーのブダペスト、ワイマール、ローマの3都市を住み分けていたのである。

パガニーニが苦勞して、1週間かけた旅行も、リストは1日で快適に旅行できたといわれる。

パガニーニとリストは、「virtuoso」と呼ぶに相応しい大音楽家であるが、元来イタリア語であるこの言葉は、日本では「巨匠あるいはヴィルトゥオーゾ」と訳され、音楽の技巧と精神性に秀でた演奏家、と通常理解されているが、19世紀に於ては、「ショーの花形」の意味もあったようである。

図101を参照してほしい（地名は現代名）。

1815-27年には、パガニーニは、ジェノヴァを中心に、イタリア中を演奏旅行した。



図101 ヨーロッパ地図

リストはイスタンブール～キーウ（現キーウ）まで演奏旅行した。北部イタリアと取り囲むアルプス山脈に注意

1828-32年には、オーストリアのウィーン、ボヘミア（現在のチェコ）のプラハ（スロバキアのプラチスラバ）、ポーランドのワルシャワ、ドイツのドレスデン、ライプチヒ、ベルリン、ワイマール、ミュンヘン、ボン、デュッセルドルフ、ハンブルグ、フランスのパリ、イギリスのロンドンなどを乗合馬車などで大演奏旅行をしている。

1832年の英国に限って言えば、ロンドンで18回、イングランドの地方で49回、スコットランドで23回、更にアイルランドで22回、合計112回も演奏会を行った。

自分の演奏にかけるパガニーニの執念には、すさまじいものがあった。

さて、地図をよく見ていただきたい。

パガニーニが、イタリアを出て、スイス、オーストリア、フランス等に入るには、険しいアルプス山脈を越えなければならなかったのである。

<付録> 3人のアルプス越え、ハンニバルとナポレオンそしてパガニーニ



図102 ハンニバルとナポレオンのアルプス越え
ローヌ川、モンブラン山、マルセイユ、ミラノ、
ジェノヴァの位置に注意

この歴史上の3人が、どのようにアルプスを越えたかは、興味ある所である。

ここでは、音楽を離れて若干、言及する。

(1) ハンニバル（前247-前183頃）

図101と図102を参照の事。

カルタゴ（現在のアフリカ、地中海沿岸、チュニジア北部）の軍最高司令官、ハンニバルは、紀元前218年、ローマ（最終的にはローマ執政官・スキピオ）と戦争状態に入る。史上名高い「第2ポエニ戦争（前218-前201）」である。

長期戦であり、ここで戦争の詳細を述べる余裕は全くない。

「ポエニ戦争」の呼称は、当時ローマ側から見て、カルタゴを「ポエニ」と呼んでいたからである。

彼は、目と鼻の先にあるシチリア島経由でイタリア半島を北上し、ローマを攻略する経路は取らなかった。

制海権をローマが握っていたからである。

彼は、地中海沿岸を西進し、イベリア半島（現スペイン）経由でピレネー山脈を越え、現在のフランス（ガリア）に入ったのである。ここで重要な事は、カルタゴの勢力範囲が広く、イベリア半島の広範な地域が、カルタゴの植民地（ヒスパニア）であり、ハンニバル自身がここで育った、という事実である。

彼はガリアに入ってから、地中海沿岸沿いに西進しなかった。

つまり、現代のマルセイユ（マッシリア）、コート・ダジュール、カンヌ、ニース、モナコ方面には進まなかった。

マッシリアがローマ軍の要所であり、守りが堅固であったからである。

彼はガリアに入り、苦勞してローヌ川を渡り、川沿いに北上し、アルプスを越え、北イタリアに進攻したのである（図103）。

アルプス越えのルートは諸説ある。さもここだと言わんばかりの説もあるが、決定的なものはない。



図103 ハンニバルのローヌ川越え
当時の象は、小型だったと言われる

地図上では、グルノーブル付近からアルプスに入り北上し、スイス、イタリア、フランスの国境交点に近い、モン・ブラン山を北から迂回する、グランサン・ベルナル峠（モンブランの東15kmで、スイス・イタリア国境を越える）他、モン・ブランを南から迂回するプチ・サン・ベルナル峠、モン・スニ峠、トラヴェルセツテ峠説などがあるが、いずれにせよ大差なく、非常に困難なルートと言う事である（図104）。



図104 ハンニバルのアルプス越え
戦象は37頭でアルプス越えに挑んだ

アルプス越え前の兵力は、歩兵5万、騎兵9千、戦象37頭であったが、イタリア進攻時には、歩兵2万、騎兵6千、戦象3頭であったと言われる。苛酷な行軍だった。

彼がこの困難なルートを選択したのは、あくまで隠密裏に進攻し、奇襲を掛ける為であった事は、言うまでもない。

膨大な犠牲を払った戦争も、前202年の「ザ

マの戦い」で、ハンニバルは敗北し、戦争は終結した。

正に「人類の歴史は戦争の歴史である」が、それは残念な事に現代にも当てはまる。

更に言える事は、人間は歴史に関心を持たないし、歴史から学ぼうとしない事である。

(2) ナポレオン（1769-1821,51歳）

1800年、オーストリア帝国に奪われたチザルピーナ共和国の奪還を目指したナポレオンは、かつてのハンニバルのアルプス越えと、奇襲戦法をまず詳細に研究した（図105）。



図105 ナポレオンのアルプス越え

歴史的戦争は、中国他世界中で詳細な記録として残されており、いつの時代でも司令官は、それらを熟知し、我がものとしておこななければならない。

彼はまずジュネーブに兵を集結し、シャモニーから、グラン・サン・ベルナル峠（2,469m）のルートを取った。

兵4万、馬3千頭で雪のアルプスを越えた。大砲は解体し、雪の中を転がしたり、持ち運んだ。

彼自身は馬ではなく、地元の農民ドルサズ

を高額で雇い、彼が手綱を引いたラバで、アルプスを越えたとされる（図106）。



図106 ナポレオンのアルプス越え
ラバに乗ってアルプスを越えるナポレオン

オーストリア軍の注意を逸らす為、モン・スニ峠にも、兵の一部を送っている。

彼もハンニバルに習って、奇襲作戦を重視したのである。

彼は、北イタリアに進攻後、ミラノを攻撃し、ジェノヴァ攻略中のオーストリア軍の北東に展開し、オーストリア軍の補給路と退路を押さえる事により、マレンゴの戦いで勝利。

最終的には、1801年のルンビル条約で、両国間の領土問題は決着した。

なお、1805年には、大砲が通れる、道幅5m前後の道路が完成した。

ナポレオンの時代、未だイタリアに統一国家はなく、ほぼ同時期を生きたベートーヴェンの事やウィーン会議の事等に関しては、既に本誌にて若干、言及している。

(3) パガニーニのアルプス越え

パガニーニの伝記「Paganini, John Sugden,

Omnibus Pres, London」他を読んでも、アルプスのどこを越えたかの詳細な記載は無く、1828年の演奏の起点であるウィーンから始まっているが、パガニーニは、サンゴタール（ゴッタルド）峠（2,106m）を経由したらしい。

この峠は、13世紀よりアルプス越えの主要ルートであったと言われる。

図107は、1800年代中頃のゴタール峠を下る馬車である。

いずれにせよ、大変な旅だったに違いなく、パガニーニは、馬車がオーバーターンして、馬車から投げ出された事もあると、言われている。（付録終り）



図107 19世紀中期のアルプス越え
サン・ゴタール峠を下る馬車

Part21 パガニーニに魅せられた4人の大作曲家達

(1) リスト

パガニーニの超絶技巧に魅せられて、ピアノ曲に編曲した作曲家の中で、最も重要な人物は、疑いもなくリストである。

リストの編曲を通じ、パガニーニの曲の重要性も、更に増幅され認知された。

彼は、「パガニーニの鐘による華麗なる大

幻想曲 ,1831-32], 「パガニーニの主題による超絶技巧練習曲 (全6曲), 1840」と、それを改変した決定稿, 「パガニーニ大練習曲 (全6曲), 1851」を作曲した。

特に、パガニーニ練習曲の第3番, 「ラ・カンパネラ, 鐘」はよく知られる。

図108は、アンドレ・ワッツの「パガニーニ大練習曲, 録音1970」である。



図108 アンドレ・ワッツ
グールドの代役としてバーンスタインに見出されたワッツ。
「パガニーニ大練習曲」

(2) シューマン

1830年にフランクフルトでパガニーニのヴァイオリン演奏を聴いたシューマンは, 「パガニーニの奇想曲によるピアノ練習曲, 作品3 (全6曲), 作品10 (全6曲)」の2つのP練習曲集を書き, リストと張り合った。もちろん, リストはシューマンを相手にしなかった。

更にシューマンは, 「パガニーニの24の奇想曲のピアノ伴奏付版」を死の年, 1855年に完成させた。ただし最後の24番だけは編曲しなかった (図109)。

クララは, 翌56年に, この曲が彼により書かれている事を確認した。この曲集が出版されたのは, 86年後の1941年である。



図109 シューマン編曲「ピアノ伴奏付, 24の奇想曲」

(3) ブラームス

ロマン派の中にあって, 古典派的スタイルを堅持し続けたブラームスまでもが, パガニーニに魅せられ, 「パガニーニの主題による変奏曲, 第1巻, 第2巻」を作曲した。

この曲は, ブラームスの代表的ピアノ曲であると共に, ピアノ変奏曲の中でも重要な地位を占めている。

図110は, 1973年録音のミケランジェリの貴重な演奏である。

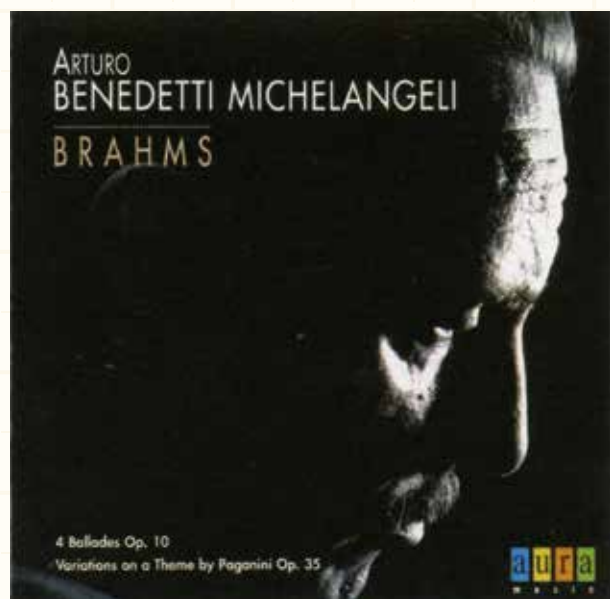


図110 ブラームス編曲「パガニーニの主題による変奏曲」
ミケランジェリ (1973)

(4) ラフマニノフ

ラフマニノフは、4曲のP協奏曲と共に、よく知られたピアノと管弦楽のための、「パガニーニの主題による狂詩曲」を自作自演している。

図111は、ストコフスキ指揮、フィラデルフィア響、1934、録音である。

20世紀の大作曲家、ピアニストの演奏が楽しめる。



図111 ラフマニノフ自作自演（録音1934）
「パガニーニの主題による狂詩曲」

その他、クラマー、ヘルツ、モシュレス、ヨハン・シュトラウスなどの歴史的音楽家、ピアニスト達のパガニーニ曲のピアノ編曲（リスト、シューマン、ブラームスを含む）が一人の演奏家のCD（演奏、マルコ・パシニ）で楽しめるのも嬉しい（図略）。

パガニーニの曲を、多くの音楽家の編曲で聴けば、各人の個性が感じられ興味深いですが、これも原曲が優れているからで、パガニーニの偉大さの成せる事である。

ショパンは、1829年（19歳）、ワルシャワ音楽院の学生の時、パガニーニを聴いているが、その反応は極めて鈍い。

弦楽器とは生涯、ほぼ縁が無かったショパンであるが、19歳の彼は、パガニーニの曲と演奏技法の重要性に気付かなかつたと共に、興味も無かつたのだろう。

他人の曲に影響されない、彼の孤独で、孤高の音楽的精神・信念を暗示しているに違いない。

ショパンは、パガニーニの甘美な小曲、「ヴェネチアの謝肉祭による変奏曲」を聴いたのだろう。この曲をわずか3分半のピアノ曲、「パガニーニの思い出」に編曲している。ショパンらしい反応、対応である。

Part22 パガニーニに関する数点の録音

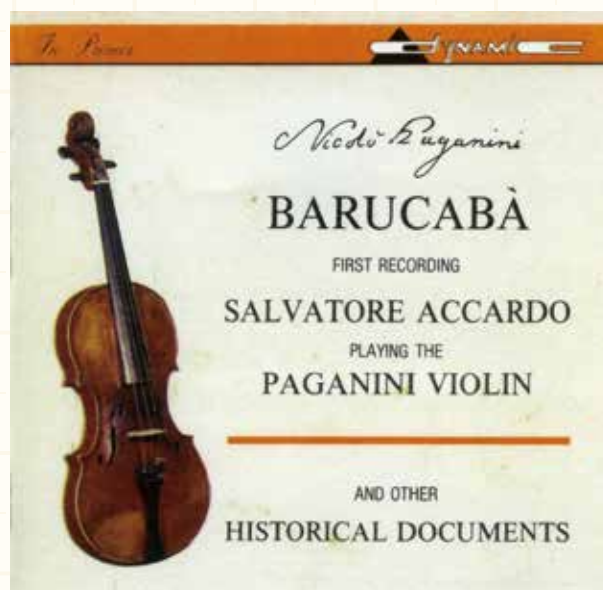


図112 「バルカバの主題による60の変奏曲」
パガニーニのヴァイオリンで演奏



図113 パガニーニに困んだヴァイオリン曲
クレーメルの演奏

(1) **パガニーニのヴァイオリンによる演奏**
 アッカルドは、パガニーニ作曲の「バルカバの主題による 60 の変奏曲」を 1969 年にパガニーニのヴァイオリンで演奏している。
 演奏時間は約 32 分（図 112）。

(2) **パガニーニに因んだヴァイオリン曲**
 ギドン・クレーメルは、パガニーニに因んだヴァイオリン曲のアルバム「ア・パガニーニ、1984 録音」をリリースした。

ここでは、4 曲が演奏されている。

ハインリヒ・エルンスト（1814 年）の「練習曲第 6 番、夏の名残りのバラ」、名ヴァイオリニスト、ミルシテイン（1904 生）の「パガニニアーナ」、ジョージ・ロックバーク（1918 生）の「カプリース変奏曲」それに、シュニトケ（1934 年生）の「ア・パガニーニ」である（図 113）。

20 世紀の曲が 3 曲あり、興味深い。

(3) **ギターとフルートによるトランスクリプション**

20 世紀も 80 年代になると、雨後の竹の子状態に設立された CD 製作会社により、誰でも CD を作る事ができるようになった。

それ自体結構な事ではある。ただギターなどのマイナーな楽器では、歴史的な有名曲は演奏され尽くされてしまっている。

そうになると、新曲を作曲して世に問うよりも、レパートリーの豊富なピアノやヴァイオリンの名曲、難曲を、腕に自信のある、例えばギターに編曲（トランスクライブ）して、世に問うた方が、容易かつ達成感も味わえると考えるのは、当然であろう。

かつてのリストが、そうであったように。

日本では、ギター演奏に於ては、山下和仁がムソルグスキの「展覧会の絵」、ストラヴィンスキの「火の鳥」のギター編曲を発表、他の楽器でも同様の試みが成され、私達もおおいに驚き、楽しんだものである。

1992 年には、パガニーニの「24 の奇想曲」が、エリオット・フィスクのギター編曲（1991、録音）でリリースされたし、同じ 1992 年には、パトリック・ガロワのフルート編曲（1991、録音）がリリースされた。

同じ年に録音されたのも興味深い。この時期の音楽趣向が反映されたのであろう。

<ティー・ブレイク>私は誰？ 医者です

ちょっと一休みしよう。私も疲れてきた。何が疲れるかと言うと、何度も訂正しながら、原稿用紙のマス目をボールペンで、一文字、一文字と埋めていく事ではない。

何が疲れるかと言うと、ピアノや机の向こう側に置かれたレコード棚に、乱雑に、ぎっしり詰め込まれた LP の中から、目的の LP を探し出す事である。

私に与えられた、幅わずか数 10cm の空間、しゃがむ事も、身動きもできない薄暗い場所での作業は、苦行以外の何ものでもない。

まず図 114 をみていただきたい。誰か分かった人は、すごいと思う。次は図 115 である。

よそ行き顔と普段顔である。当然、普段顔が彼の真実の姿である。



図 114 よそ行き顔の私は誰？
 私は医者です

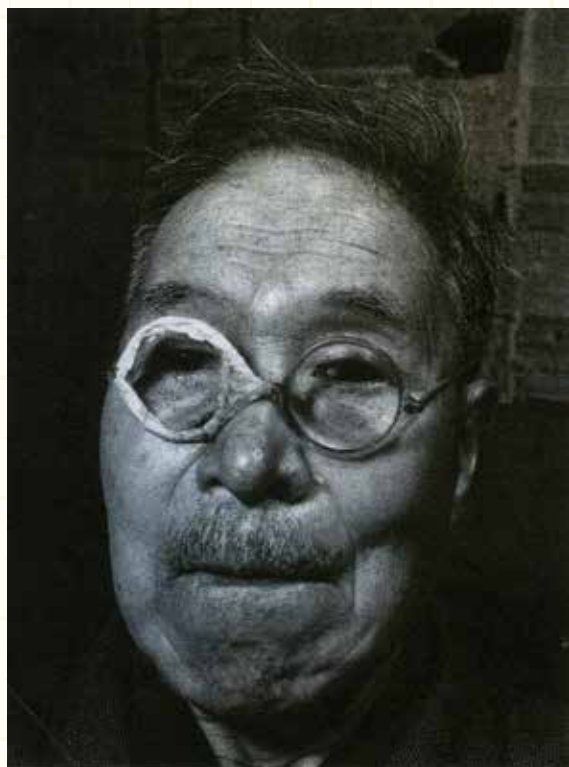


図 115 普段顔の私は誰？
バックの破れた障子と独特の眼鏡

背景の大きく破れた障子，特異な眼鏡。

多分，このような風体の医者^{ふうてい}は，現在の日本には決していないだろう。尊敬に値する。

彼は，日本の医学史に燦然と輝く人物で，明治3（1871）年に生まれ，日本である重大な発見をし，日本語で論文を発表。

その後，独語で論文の要約を発表し，名声を博した。

写真家の撮った彼の眼差し^{まなざ}は，彼の人生観，精神と為人^{ひととなり}を如実に写し撮っている。

撮影者は，私が写真好きだった中高生の頃に憧れた土門拳である。彼の「静，清の浄化された日本の世界」は実にいい。

外国人では，ピーター・バッシュの，「女性のフォルムとその圧倒的な躍動感に満ちた，動の世界」が好きだった。

この写真の主は，赤痢菌を発見した志賀潔先生である。「*Sigella dysenteriae*」，この学名の中に，彼の名が残されている。

志賀も土門でなければ，決してこのような写真を撮影させなかっただろう。

現代的な感覚では，便を顕微鏡で観察す

れば（もちろん原因が細菌と分かっていた時代であるが），すぐに原因菌が発見できるだろうと思うかもしれない。然しそれは，私共，愚かな凡人の発想である。

当時も当然，世界中の研究者が，同様の発想で実行し，発見できなかったのである。

何が問題なのか，何が困難だったのかに気付く事が大切なのである。

顕微鏡の中にある膨大な細菌の中に，赤痢の原因となる菌はいるのか？ いれば，どれがその菌かを同定するのが困難だったのである。

彼は，34名の便中の菌を分離培養し，苦勞の末，赤痢菌を発見したのである。

Part23 パガニーニの後を継ぐ， 21世紀の弦楽器奏者達

古来，クラシック音楽の歴史に名を残す演奏家は多いが，ここで言う名演奏家（巨匠）は，20世紀に入りLP, CDを比較的多く残し，現在でもその音楽を聴く事ができる人達である。

20世紀末までは，音楽を勉強し，音楽を聴き込み，国内外の音楽情報に精通し，演奏に対する判断力，批判能力を持つ学者や批評家達の活動の場があったが，21世紀に入ると，日本の国力，経済力，クラシック音楽の衰退，音楽のショー・イベント化が進行し，それらの人達が消えてしまった。

現在は演奏会の企画力，宣伝能力のある人がいれば，それで十分な世の中になった。

1990年代に，音楽の友社から，「クラシック，不滅の巨匠達」「続・不滅の巨匠達」「現代の巨匠達」の3冊の本が発行された。

彼らが消えた今，今後，同様な本が作られる事はなかろうし，作る必要性もなかろう。

ここでは，この中に選ばれた一握りの演奏家達の中から，10人の弦楽器奏者を選び（主にヴァイオリン）紹介しよう。

私の趣味は、サイン入り LP を聴く事なので、各人、図としてそれを添える。

図 116 は、「不滅の巨匠」に選ばれた、12名の弦楽器奏者達である（赤下線は何かの折に、私が引いたもので意味はない）。

特にヴァイオリンで名を成した演奏家は、例外なく全員が神童・天才である。楽器が小さくて扱い易く、手、指の運動機能、言語・聴覚・記憶等の脳機能の発達時期に適合しているのだろう。

弦楽器奏者	
<u>Pablo Casals</u>	<u>パブロ・カザルス</u>
<u>Jascha Heifetz</u>	<u>ヤッシャ・ハイフェッツ</u>
<u>Joseph Szigeti</u>	<u>ヨーゼフ・シグティ</u>
<u>Jacqueline Du Pré</u>	<u>ジャクリーヌ・デュ・プレ</u>
<u>Pierre Fournier</u>	<u>ピエール・フルニエ</u>
<u>Arthur Grumiaux</u>	<u>アルテュール・グリュミオー</u>
<u>Nathan Milstein</u>	<u>ナタン・ミルスタイン</u>
<u>David Oistrakh</u>	<u>ダヴィッド・オイストラフ</u>
<u>Mstislav Rostropovich</u>	<u>ムスタスラフ・ロストロポヴィチ</u>
<u>Andrés Segovia</u>	<u>アンドレス・セゴビア</u>
<u>Isaac Stern</u>	<u>アイザック・スターン</u>
<u>Henryk Szeryng</u>	<u>ヘンリク・シェリング</u>

図 116 20 世紀を代表する「不滅の巨匠」12 名！
わずか 12 名である

(1) ジャクリーヌ・デュ・プレ (1945-1987)
とダニエル・バレンボイム (1942-)

このアルバムの解説書には、「結婚式とレセプション後、新郎・新婦はイスラエル・フィルと共に現れた。……シューマンのチェロ協奏曲を演奏した……」とある (図 117)。

2 人がシューマンを選んだ理由は書かれていないが、この 2 人の演奏家は、クララ・ヴィーグとロベルト・シューマン以来の演奏家同士のカップルと言われていたからだろう。

デュ・プレは、カザルス、トルトゥリエ、ロストロポヴィッチにも学び才能もあった。70 年代には MS (Multiple Sclerosis : 多発性硬化症) で演奏できなくなったが、60

年代には既に大演奏家であり、女性で唯一の「不滅の巨匠」であった。

バレンボイムも 1952 年にフルトヴェンガーに、その能力を褒められている。

ピアニストとしての彼は、21 歳の時にベートーヴェンの P ソナタ全曲を公開演奏し、その後、全曲演奏を 5 組録音している。

今時、有名ピアノコンクールの優勝者でも、21 歳でベートーヴェンの P ソナタ全曲を公開演奏できる者など、皆無であろう。

指揮者としても、シオルティからシカゴ響を引き継ぐなど、才能を示した。

デュ・プレの活動期間が短く、シューマンの曲を演奏し、2 人のサイン入りの LP が、私の手元に届いたのは、奇跡的であった。

バレンボイムは、ユダヤ人ではあるが、2000 年以降、度々世界平和のため、ヨルダン川西岸やガザ地区へのイスラエルの占領、進攻に反対した。

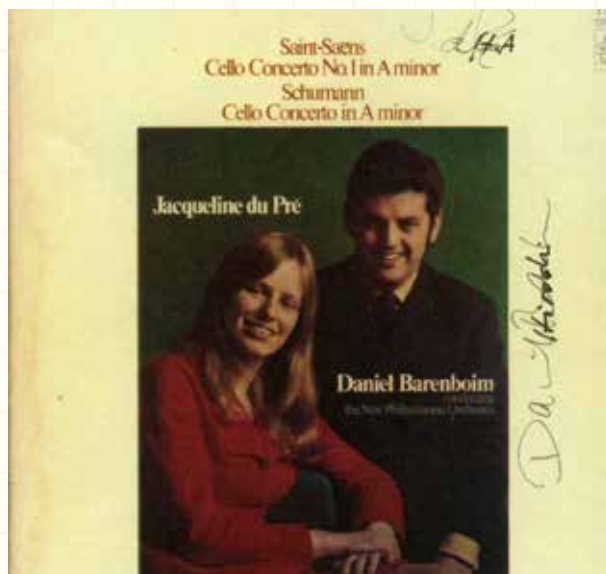


図 117 デュ・プレとバレンボイム

(2) アイザック・スターン (1920-2001)

彼はウクライナ生まれで、1 歳時に米国に移住。独奏者としての他、60 年に P のユージン・イストミン、Ce のレナード・ローズとスターン・トリオを結成し室内楽で活動。

パールマン、ズカーマン、マ、ミンツらを見出した (図 118)。

彼は宮崎国際音楽祭 (1996-) の初代音

楽監督としても知られた「不滅の巨匠」であった。



図118 アイザック・スターン

(3) ヘンリック・シェリング (1918-1988)
ポーランドのワルシャワ生まれの彼は、フーベルマン、フレッシュ、ティボーらに師事した(図119)。

ナチスのポーランド進攻に対し、母国に帰国した彼は、亡命政府のスタッフとなり、7ヶ国語に通じた能力を生かし、ポーランド難民の亡命先を求め各国を訪れ、多くの難民を受け入れたメキシコに1942年に移住し、同国の弦楽器演奏の向上に努めた。



図119 ヘンリック・シェリング

彼は、ルービンシュタイン、フルニエらとトリオを組むなど、国際的に活躍した「不滅の巨匠」であった。

(4) グルミュオー (1921-1986) と
アンセルメ (1883-1969)

彼はベルギー生まれで、デュポア、エネスコ門下のヴァイオリニストである。

このLPは私にとって最も貴重なもので、決してお金では買えないものである。

私がかつて、多分日本(世界)最大のクラシック音楽愛好家向けの、外国盤LPレコード店のカタログの巻頭言を、何十回かに亘り、書かせていただいた折に頂いた、貴重LPである。

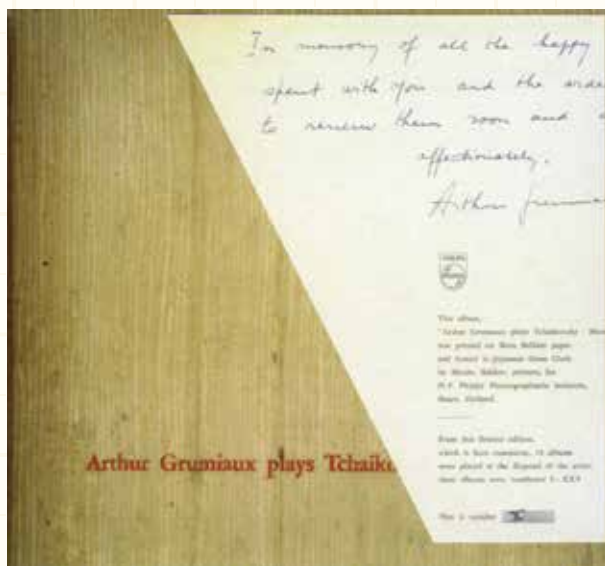


図120 グルミュオーとアンセルメ

彼がチャイコフスキとメンデルスゾーンの協奏曲を、ハイティング指揮、コンサートヘボウ管で演奏した時の録音である。

私は、それまで知らなかったが、演奏者用の特別装丁のLPがあるという(美術界で版画、銅版画などでは一般的)。

これはグルミュオー分で、シリアル No.X (10/25) が付けられている(図120)。

これには、本人のA4版弱のサイン入り生写真が付いている上に、スイス・ロマンダ管の創設者・アンセルメへの直筆コメント「あ

なたと過ごした、全ての幸せな日々の思い出に…」と、アンセルメのコメントが記されている。アンセルメも、指揮者の「不滅の巨匠」である。

社長の山田氏が私に下さった時の手紙から、彼が断腸の思いで、私に下さった事が感じられたが、ありがたく頂戴した。

LP好きが、LPを手放す事は、大決心がなければできない。共に涙、涙……。

(5) チョン・キョンファ (1948) と ピンカス・ズカーマン (1948)

この2人の共通点は、1948年生まれである事、米国の同じ音楽院で、同じ先生にヴァイオリンを学んだクラスメートである。

特に重要な点は、1967年の米国のレーヴェントリック国際コンクールで共に1位となった事である。もちろん才能があった事は間違いないが、教育法が平均化してきたのだろう(図121, 図122)。

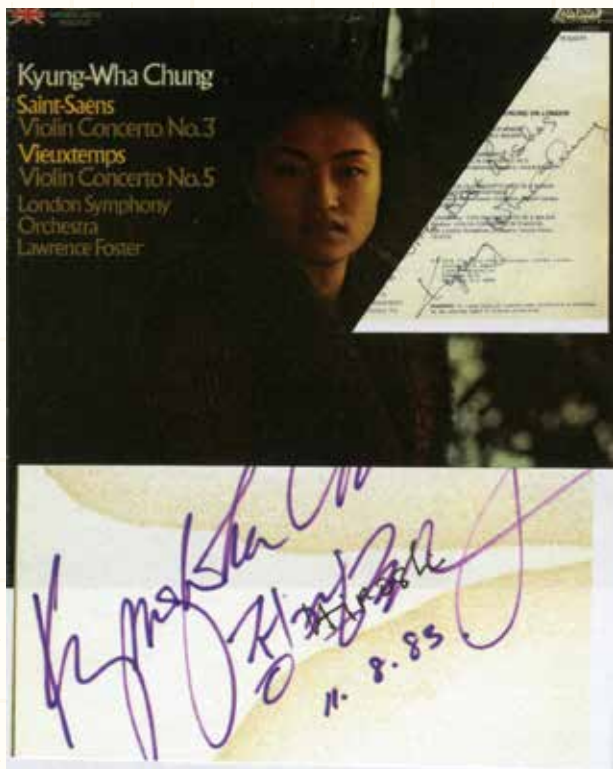


図121 チョン・キョンファ

レーヴェントリックは審査基準が厳しかったが、それ故、早くに中止された。

図121は、チョンのLPのサインと色紙のサイン。色紙の1983年のサインは、英語と自国語で書かれ、サービス満点である。



図122 ピンカス・ズカーマン

スターンとカザルスに見出されたズカーマンもいい演奏家ではあるが、2021年のパウハラ的発言は、非常に残念である。2人は、アッカルド、スーク、五嶋みどり、パールマンらと共に「現代の巨匠」に選ばれた。

(6) アンネ・ゾフィー・ムター (1963-)

13歳でカラヤンに見出されたムターも今や大スターとなった。貫禄も十分。

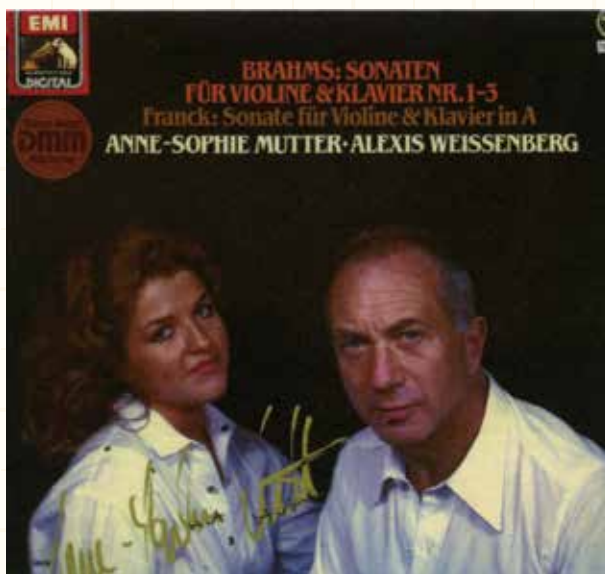


図123 アンネ・ゾフィー・ムター

以前、カラヤンと共演したLPを紹介したが、今回は、1983年のブラームスの「PとVnの為のソナタ」他のワイセンベルグとの共演LPである（図123）。

ワイセンベルグは、1947年のレーヴェントリックの優勝者で、ラフマニノフの「前奏曲集」他にみられるように、彼のピアノのセンスは非常によい。ゲーリー・グラフマンやヴァン・クライバーンなどが彼に続き優勝。

パールマン（Vn）は、63年の優勝者。

とにかく、高レベルのコンクールだった。

(7) ウィリアム・プリムローズ (1904-82)

ヴァイオリンに比し、ヴィオラはなぜか地味な楽器である。

グラスゴー出身の彼は、イザイの助言で、ヴァイオリンからヴィオラに転向し、ヴィオラ奏者のパイオニアとなった。

またプリムローズ弦楽四重奏団を結成し活躍した（図124）。



図124 ウィリアム・プリムローズ

72年には、文部省の招きで、芸大や桐朋音大で教鞭をとった（「続・不滅の巨匠」）。

このLPジャケットのバルトークの自筆譜は、バルトークがプリムローズに献呈したヴィオラ協奏曲の一部である。20世紀の日本のヴィオラ奏者では、今井信子が注目され

た（「現代の巨匠」）。

(8) ユーディ・メニューイン (1916-99)

NY生まれの彼は、神童中の神童で、パーシッガー、エネスコ、ブッシュに師事した。

超有名人の彼は、19歳の時に世界演奏旅行を行い、13ヶ国・73都市で演奏した。

彼は戦後、ナチ問題のフルトヴェングラーを助け、フルトヴェングラー指揮のベルリン・フィルと共演した最初のユダヤ人となったが、その為、アメリカ人の一部の強い反感を持たれ、ロンドンに永住・帰化した。



図125 ユーディ・メニューイン

エリザベス女王から、ナイト、ロードに叙せられ、英国では絶大な人気を誇った。

図125は、1929年（13歳）、EMIのアビー・ロード・スタジオ録音のモーツァルトの「Vnソナタ、K.296、アンダンテ楽章」の復刻版である。

彼の生誕75周年を記念して、限定300枚がファンのために作られた。

私の手元に3枚届いたのは、ラッキーだった。2枚は音楽好きの人に差し上げたので、手元には、シリアルNo.90の1枚だけが残った。

通常、レコードの中央に丸く切って曲名などをプレスする紙を、四角のままサインして添付する、愛好家向けの特別仕様にしてくれ

ているのは、ファンにとっては嬉しい。

(9) エリカ・モリーニ (1904-1995)

エリカは、オーストリア出身、アメリカのヴァイオリニスト。



図126 エリカ・モリーニ

7歳でウィーン音楽院・ヴァイオリン科に女性初、かつ最年少で入学。

高等科は、16歳でないと入学できない規定であったが、彼女は9歳で許された。

12歳でウィーンでデビューし、ニキシェから、ゲヴァントハウスやベルリン・フィルに招かれ演奏した。

フルトヴェングラー、クーセヴィツキー、メンゲルベルグ、ワルター、セルなどが、彼女を絶賛し共演した(図126)。

然し、20世紀前半は、女性ヴァイオリニストが、非常に冷遇された時代だった(ピアニストは許された)。

この時代に名を残したのは、このエリカ、ヌヴェーそれにジョコンダ・デ・ヴィートなど数名なのは、その為である。

エリカのストラッドは盗まれ、ヌヴェーのストラッドは周知のように、飛行機事故で失われた。

ヌヴェーとデ・ヴィートは「続・不滅の巨匠」。

(10) アンドレス・セゴビア (1893-1987)

最後に「不滅の巨匠」、ギタリストのセゴビアを挙げておこう(図127)。

スペイン生まれのセゴビアは、15歳の時、グラナダでデビューし、約80年間、ギター音楽の発展に尽くした。

彼は、ロドリゴ、ヴィラ・ロボス、ポンセらとも親しく、多くのギター曲を献呈された。



図127 アンドレス・セゴビア

欧米では、主要音楽大学にギター科が設置されていると言う。

以上、メニューインを除き、ここに挙げたLPは、日本で唯一のものであろう。

今回は、イギリスのターナーの「霜の朝」と、フランスのミレーの「晩鐘」という2枚の歴史的名画の関連を、市医師会報で報告する事もでき、大変嬉しい。

(つづく)